信濃の海

大原富枝

信従の海

大原富枝

講談社

信従の海

一九七七年十月二十八日第一刷発行

著　者　大原富枝
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社／東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号／一一二
　　電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）振替／東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　一一〇〇円

© Tomie Ōhara 1977, Printed in Japan　落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。（文1）

0093-128670-2253（0）

目次

吉野川　5
善福寺川　73
ネヴァ河、ヴォルガ河　133
信従の海　217
あとがき　277

装幀　朝倉　摂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

信従の海

吉野川

向う岸の山際に車をとめてこっちに向って歩いて来るときから、女はその男を意識していたが、眼は動かさないで堰堤にもたれていた。四、五メートルほどのところまで近付いて来た男は、同じように堰堤にもたれて水を眺めている。

ダムの水はさざなみ一つなく静もっていた。空気は澄み通っていて、植物の吐く透明な匂いが濃厚に充実している。肌に刺戟をおぼえるほどであった。自分の体臭が異物として拒まれているようで、女は気になっていた。男の体臭も密度の高い山の空気のなかに溶け込めなくて、女の鼻先あたりまで拒まれながら漂って来る。その体臭には煙草の匂いが染みこんでいた。べつにそんな興味もないのに、まるで男の身許を探るように、その体臭を分析している自分の感覚に気がついた。

眼の前に湛えられているのは水ではなくて「死」のように見える、と女は思った。この水は生きていない。ほんとうの水は生きていて流れるものだ。

「今日のダムはまるで眠っているように見えますね、暴風雨のときは凄い様相を呈しますよ、見たことありますか」

男は話しかけて来た。自然でなんの抵抗も感じさせなかったのは、どこかなまりがあって親しい気がするせいであろうか。

「いいえ、初めてです」

頭だけ少し男の方へ向けて、首を振った。

「満水になって、この堰堤がその重量に堪えられるぎりぎりで、あのローラーゲイトを揚げて放水するときは、凄いですよ。地軸を揺がす大音響で、地獄という言葉を思うくらいです」

「そうですか、そういうときを見てみたいと思いますね」

心からそう思って答えたが、しかし、女はなぜかもうそんなダムの姿を見たことがあるような気がした。その一方で自分がいまこうして堰堤の上に立っていることが夢幻のなかのことで、現実ではないようにさえ思っている。ほんとうは自分は東京の家にいて、幻想のなかでダムを見ているのではないか……

いま見ているこのダムは確かに実在するものだろうか、ダムを見たいと希んだ自分の眼が生み出している幻覚ではないだろうか、そんなことをふと思っている。

女はもう若くはなかった。さわさわと身辺に湧き立つように華やいだものが、誘惑の流眄(りゅうべん)をくれながら周りを流れていた、そういうものが無限にあるように思われていたのに、いつからか、ふっと掻き消すように失くなってしまっている。ふっと身体の周りを見廻して別の世界に来てしまっている心地がする。愕然として見廻しても、荒寥としてもともと何も存在しなかったように、虚空だけが漠々と広がっている。ほんとうに、あれらのものは初めから存在しな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

かったのであろうか。

ある夜、女はふと、水を見たい！　と不意に思い、急にベッドの上に起き直った。水、故郷の川の流れ、淵と瀬、闇のなかに泡立ち流れ、渦を巻いてゆく水の姿が見えて、静かな歓びが湧いて来た。

遠くで街の音が鈍重に響いている。ほんとうは何の物音もしてはいないのだ。静かな住宅地の深夜。しかし女の肉体が何かの音を聴いている。ずずーん……と底深い地下からの唸きに似た音。長い都会暮しの間に、女の肉体に染み透ってしまった人間の暮しの雑音が、この深夜、闇のなかから聞える。

環状七号線の歩道橋の真中に立って、足の下の車の洪水を眺めていたことがある。六車線の道幅いっぱいに走る車の車体は見えなくて、ハレーションを起しているライトの化けものが、昆虫の大群が蠢くように、煌めき、弾き合い、重なり合い、漂いながら無限に流れて足下に吸い込まれて行く。反対車線からは無限に手繰り出すように光の虫が帯になって出て来る。昆虫たちは猛々しいほど渦を巻きながら、蠢きながら、雪崩れて行く。ずずーんという唸きだけが歩道橋の女の足下から湧き立って来て、肉体のなかに吸いこまれていった。

身体のなかに淀んでいるその唸きに耳を澄して深夜のベッドに坐っている女は、その唸きに対し合ってあるもの、それに拮抗出来るものとして水を見ていた。故郷の水の流れを見ていた。

「どちらからですか」

男が訊ねた。どこからというべきなのだろうか、と女はそんな簡単なことに戸惑った。
「ここは、私の故郷ですから……」
「そうですか、私にもここは故郷ですよ」
男の言葉には、ちょっと皮肉な味わいがあるように思われた。初めて女は注意深く相手を見た。眼とか眉とか、口もとなどに、何か古い記憶はないか、と探っている。
「もっとも、私が生れたのはここじゃありませんが、しかしやはり故郷にはちがいありません。ここよりほかに私の故郷はある筈ないのです」
こちらから何かを引きだすような質問をする習慣を持たない女は、黙っていた。人の話そうとしないことを訊き出すのも嫌いであったし、反対に話す気のないことを訊かれるのも好きではなかった。
飛行場に下り立って紫紺色の静かな山脈(やまなみ)の姿を眺めたときのことを思い出していた。着陸した機体の起す烈風を、背を向けて堪えている地上勤務員たちの背後に、山脈は確かにあった。疑いようのないものを、尚確かめるようにしげしげと眺めた。山脈というものはなぜこんなに優しいのであろう。故郷はその懐にあって、水はそこを流れている。しかしそのときふと思った。——ほんとうに流れているであろうか、と。
この島は、と飛行機の上から眺めた印象があとを引いて、島という言葉がつい出たが、島というには少し大きすぎておかしかった。本州は勿論、北海道も九州も島とはいわない。淡路島や佐渡は島である。それ等に比べるとずっと大きいけれど、やはり故郷も島にはちがいないの

だ。島というには少し大きいので、中央分水嶺をなす山脈もかなり険しく、長く、たたなわる山襞の懐も深い。東西に流れる大河が一つあって、その支流が幾つか、その懐を縫って流れている。支流の一つに沿って車は山襞を分けて遡ってゆく筈であった。

女はだからいつも車窓に眼を向けていた。しかしそこに、期待した川は現れなかった。それは川の残骸、あるいは死骸とでもいおうか……

歳月に洗い抜かれ、風雨に自然に磨かれた青い岩や、丸石の美しい川、そこに生きる人々との交流によって子供のように明るく表情の豊かであった川は、死んでいた。川原も草茫々に荒れ果て、長く人の踏み入った気配はない。水の流れや人々の手足にあやされていたころに持っていた、川の文化がもう死んでしまっている。人気のない静けさと荒寥だけがある。水とはいえない赤く濁った溜り水が崖っぷちにところどころ、鉱水のようにも見えるのが一層無残であった。

女の知っている川は、雨風や日光とともにいつも歌っていた。人々の手足によって愛撫されるのを喜んで、声をあげて戯れあったものだ。川岸の岩も崖も、川原の石の一つ一つも、人々の息吹きと愛情によって培われた、艶めいた肌と人懐っこい表情を持っていた。磯つつじの花も、河鹿も、魚たちも、人間の心を知って生きていた。瀬になって滾り落ち、しぶきを上げて走り、白く泡立ち、淵になって蒼く湛えて休息した。あの川は、澄み透った青い水は、どこに去ってしまったのか。

「運転手さん、ダムまで真直ぐに行ってみて下さい」

急にそう決心して頼んだ。村を素通りして車は橋を渡る。わが家のあったあたりを遠眼に一瞥しただけで過ぎて行く。村にはいってからすでに四つの橋を渡った。村役場の下の、岩から岩へと中継ぎして三枚の板橋が架っていた、この川筋で女が最も親しみ、愛した場所も、高い橋脚を持つ本格の岩丈な橋になっている。一番の大針金を何十本も撚り合せた太い綱で繋ぎ合せた板橋は勿論、その袂にあった山桜の古木の姿もない。

町から村へはいる大川の渡しには、あのころ渡し舟があった。増水のときは渡し守がいて棹さして渡してくれたが、いつもは各自が綱を手繰って小舟で往復していた。そこも高々とした長い長い橋になっている。五つ目の橋を渡ると隣の村になる。郵便局は隣村まで行かなければならなかった。

「沈下橋はどうしたのかしら……」

自分の過去に訊ねる気持でつぶやいた。運転手に訊くのは憚られるものがある。

沈下橋など、疾うの昔に壊されてしまったのだ。——増水すると、水が橋の上を越えて流れる仕組みになっているその橋を渡って、娘であった女は東京への速達や書留郵便を送りにいった。梅雨どきや、夏の驟雨の日は、往きはまだ橋桁がかなり見えていたのに、復りは桁に引っかかった流木に渦巻く濁水が、数メートルの高いしぶきになって頭から降ってくる。しっかりと橋の面に眼を据えて足許ばかり見詰めていても、ともすると渦巻に誘われてよろめきそうになる。渡り切って振り返ると濁水はもう橋を越えていた。濡れそぼちて走って帰った息の弾みが、いまも女の生理に甦って来る。そのような思いをしても手紙を書きつづけ、送りつづけた

人がいた。
「この橋の少し上に、そうですね、あの辺に沈下橋があったですね」
心の中を覗いていたように、運転手が教えてくれた。
「あれが、ダムです」
行手正面に、山に挾まれた逆三角形のコンクリートの白い壁が、にょっきり聳え立っている。ダムの堰堤だという。頭上に圧し被さるように高々と、うっと唸きが出るような、一種無法な威圧感で迫ってくる。堅固な堡塁に似ている。
「あの上に高く聳えている橋みたいなものは何でしょう?」
「あれは、ローラーゲイト。大雨のとき太いワイヤーロープであれを捲上げて放水しますらあ。全部で六門ありますきにねえ。一門を全開したら千五百トン出しますきにねえ、凄いもんですぜよ」
話しているうちに運転手が少しずつ昂奮して来るのが、言葉遣いの変りようでわかった。
「六門全部開けたら九千トン、下の方の村も町も一呑みですらあ。最大放水量二千トンの協定が出来ておりますけんど、去年の五号台風のときは物凄い水で、とてもダムが保たんいうて、五百トンオーバーの放水をしましたがよ。下の部落が水に浸って畑作がわやになってしもうたですらあ」
「そりゃあお客さん、凄いもんですぜよ。それこそ天地がつぶれるかと思うような、滅相もない音がして、部落はすっぽりしぶきに包まれて、濃い霧が立ち込めたように消されてしもう

た。口で話してもとてもわかりませんぜよ、実際を見んことにゃ……」
車は山峡を登って行く。ダムはまた隠れて両側から山が迫る。暫く走って、突然湖畔に出た。そこにダムがあった。車から下りて広い、沈黙した水面に眼を奪われながら、囚われた水、と女は思った。やっと水を見つけたが、しかし水はここで深い沈黙のなかにいた。殆ど死んでいる、と思うほど静かに。

「これで三度目です。二度目に来たときちょうど台風と出逢って、放水の現場を見たんですよ。なにか、いままで経験のないような思いをしましたな、なんというか、首根っ子を摑んで振り廻されるような、無力感ていうか……まあ似ているといえば戦争にいって、最初の敵の集中砲火を浴びた時のような、いや、それともちがうといやあ、全然ちがうけども」
男は堰堤をひたひた叩きながら、彼も運転手のように、話しながら少し昂奮を見せている。
「あなたの村は、この水底になったんですか」
ふと話題を変えた。
「いえ、村は向うにいまもあります」
首を振って、女は登って来た道の方を振り返った。
「子供のころ、父に連れられて遊びに来た私のうちの山がこの底になっている筈です。も少し上流の方……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c